

第一章 丸山豊記念現代詩賞の歩み

第一節 実行委員会の概要

丸山豊記念現代詩賞（以下丸山賞と略記する）は平成三年十二月二十六日に「丸山豊記念現代詩賞実行委員会」第一回会議が開催されたことに始まる。この会議では委員の決定、実行委員会会則などが決定されている。その際に提出された「丸山豊記念現代詩賞運営要項」がこの賞の設立の目的などを明らかにしており、概略を紹介する。

1・基本的な考え方―伸びやかな個性を育む文化都市づくり
久留米市では、今年度から始まる十カ年間の第三次総合計画において、めざすべき四つの都市像を定めた。その都市像の第一に掲げたのが「伸びやかな個性を育む文化都市」である。

この総合計画に基づき、文化都市づくりの施策の一つに丸山豊記念の現代詩に関する賞をとりあげ、今後継続的に実施することとした。その趣旨は次の通りである。

(1) 文化の発信地として日本の現代詩の発展に寄与

久留米を中心とした筑後地方は、以前より芸術面で数多くの人材を育んでいる。この豊かな風土は、近代では明治ロマン派の画家青木繁を始めとして、今日の現代抒情詩の先達者丸山豊にいたるまで、その道を代表とする人々を生み出してきた。

今回この文学賞を設けることによって、文化都市久留米に永年育まれてきた芸術文化の土壌を背景に、真に文化の発信地として、広く日本の文学界の発展に寄与しようとするものである。

(2) 郷土が生んだ偉大な詩人「丸山豊」の顕彰

丸山豊は、その文化活動に対して一九七三年久留米市文化賞、一九七四年西日本文化賞を受賞したほか、海外においても一九六九年、アラゴン主宰の「フランス文学 (LES LETTRES francaises)」紙上で「十人の日本詩人」として紹介され、また一九八九年、日本現代詩人会が主宰する「89日本の詩祭」において、これまで室生犀星、堀口大学、草野心平などが受賞した先達詩人顕彰を受けるなど、日本現代詩における代表的な詩人である。

丸山豊は、現代日本における叙情詩の中で輝かしい業績を残したのみならず、以前より後進の指導にも努め、その中から輩出してきた人の中には今日の文学を担っている人々も少なくなく、郷里久留米でも現代詩研究会を長年主宰するなど、地域の文学振興に多大な貢献を成した。

その功績を顕彰し、広く一般の認識を深めるとともに、現代詩に対する意識向上を図ろうとするものである。

(3) 優れた詩人の発掘と創作活動の奨励

丸山豊の優れた業績を記念する全国有数の文学賞として、多くの詩人達がこの賞をめざすことにより、創作活動に刺激を与え、奨励しようとするものである。

(4) 都市イメージと芸術文化風土の向上

この文学賞を媒介として、「芸術のまち久留米」を全国的にアピールし、都市イメージを高めるとともに、全国レベルの詩人の作品や講演に市民が直接接することによって、地域の芸術文化風土の質をさらに高めていこうとするものである。

2・事業内容

過去一年間の現代詩に関わる刊行物を受賞対象とした文学賞

(1) 名 称 丸山豊記念現代詩賞

(2) 資 格 日本国内在住者

(3) 対象作品 選考の年の前年一年間に国内で刊行された現代詩に関わる刊行物で、その奥付に発行日の記載がある物

(4) 賞 丸山豊記念現代詩賞 一点 賞状

副賞 一〇〇万円

(略)

(7) 選考方法 審査員による選考

3・運営

(1) 事業の運営

① 実行委員会を構成し、同委員会が具体的な実施機関となる。

委員会の構成メンバー

氏名	役職名
久留米市	石原亨 助 役
報道七社会	井上英夫 西日本新聞久留米総局長
久留米市議会	内田栄一 副議長
久留米大学	岡村繁 法学部教授
久留米市教育委員会	桑野善吾 教育長
久留米連合文化会	古賀ユキ 副会長(文学関係)
久留米商工会議所	小林秀樹 専務理事
信愛女子短期大学	高士興市 児童学科教授(図書館長)

② 主催 丸山豊記念現代詩賞実行委員会

久留米市

(2) 選考方法

安西均氏(元日本現代詩人会会長)並びに川崎洋氏(詩人)に選考を委嘱する。

(後略)

第二節 実行委員会委員の変遷

実行委員会の構成メンバーは第一回の実行委員会で決定され、構成を基本的に変えずに二十五回まで維持されている。委員の変遷は第1表に示している。実行委員会の事務局は第一回から第六回までは久留米市文化生涯学習課が担当し、第七回には事務局が市民文化部文化振興室となり、第六回からは、久留米の幹事は廃止され山本源太氏のみが幹事であったが、第七回から委員となり、実行委員会委員のみになっている。平成十年(第八回)からは事務局を財団法人久留米文化振興会が担当することになり、現在に至っている。

実行委員会会長は久留米大学の法学部長岡村繁氏に第五回迄担当いただいたが、久留米大学に文学部が開設されるに伴い、歴代の文学部長にお願いしている。副会長は副市長(助役)、久留米市教育委員会教育長及び西日本新聞久留米総局長に委員を委嘱している。

また、監事は久留米商工会議所専務理事と久留米市議会副議長にお願いしている。文学関係者として高士興市氏(児童文学者)と江頭肇(松原新一)氏に委嘱し、江頭氏は平成二六年に亡くなるまで十三年も委員を務め、氏の賞の発展への貢献は大きいものがある。また、山本源太氏(詩人・陶芸家)には第一回から第六回までは幹事として、七回以降は委員として第二十回まで永年にわたり丸山賞の運営にご尽力いただいている。

第1表 丸山豊記念現代詩賞実行委員会名簿（第1回から第25回）

	会長	副会長	監事	委員	委員	委員	委員	幹事	幹事
第1回	岡村 繁	石原 亨 古賀ユキ	内田栄一 小林秀樹	井上英夫	桑野善吾	高士與市		諸藤成信 山本源太	平川紘二
第2回	岡村 繁	石原 亨 古賀ユキ	内田栄一 小林秀樹	桑野善吾	桜井弥久	高士與市		諸藤成信 山本源太	平川紘二
第3回	岡村 繁	石原 亨 古賀ユキ	牟田晃 小林秀樹	桜井弥久	桑野善吾	高士與市		諸藤成信 山本源太	中井和広
第4回	岡村 繁	古賀ユキ	牟田 晃 小林秀樹	松永年生	桑野善吾	高士與市		中井和広 山本源太	
第5回	岡村 繁	古賀ユキ	野中一浩 小林秀樹	松永年生	桑野善吾	高士與市		山本源太 吉丸 太	
第6回	鈴木 廣	古賀ユキ 木下隆一	野中一浩 小林秀樹	郡田 弘	桑野善吾	高士與市		山本源太	
第7回	鈴木 廣	古賀ユキ 木下隆一	田中多門 小林秀樹	桑野善吾	高士與市	橋爪正道	山本源太		
第8回	堂前亮平	古賀ユキ 木下隆一	田中多門 小林秀樹	桑野善吾	高士與市	橋爪正道	山本源太		
第9回	堂前亮平	古賀ユキ 赤司睦広	石橋 力 小林秀樹	桑野善吾	高士與市	中本 勝	山本源太		
第10回	堂前亮平	古賀ユキ 赤司睦広	石橋 力 小林秀樹	石川集充	江頭 肇	中本 勝	山本源太		
第11回	岸チズ子	大津留敬 赤司睦広	佐藤晶二 古賀義幸	石川集充	江頭 肇	岩尾清治	山本源太		
第12回	岸チズ子	大津留敬 坂本正憲	古賀義幸 佐藤晶二	岩尾清治	江頭 肇	山本源太	石川集充		
第13回	岸チズ子	大津留敬 坂本正憲	原 忠雄 古賀義幸	古賀和裕	江頭 肇	山本源太	石川集充		
第14回	岸チズ子	田内正宏 坂本正憲	原 忠雄 古賀義幸	古賀和裕	江頭 肇	山本源太	石川集充		
第15回	中西吉則	田内正宏 坂本正憲	吉田帰命 古賀義幸	大森伸昭	江頭 肇	山本源太	石川集充		
第16回	中西吉則	田内正宏 坂本正憲	吉田帰命 古賀義幸	大森伸昭	江頭 肇	山本源太	石川集充		
第17回	中西吉則	田内正宏 榎原利則	秋吉政敏 古賀義幸	大森伸昭	江頭 肇	山本源太	石川集充		
第18回	中西吉則	田内正宏 榎原利則	秋吉正敏 古賀義幸	玉井行人	江頭 肇	山本源太	堤 正則		
第19回	木藤恒夫	深野亨輔	原口新五 古賀義幸	玉井行人	江頭 肇	山本源太	堤 正則		
第20回	木藤恒夫	橋本政孝 深野亨輔	原口新五 古賀義幸	玉井行人	江頭 肇	山本源太	堤 正則		
第21回	木藤恒夫	橋本政孝 深野亨輔	堀田富子 古賀義幸	玉井行人	江頭 肇	山本源太	堤 正則		
第22回	木藤恒夫	橋本政孝 深野亨輔	堀田富子 穴見英三	青木忠興	江頭 肇	山本源太	堤 正則		
第23回	遠山 潤	橋本政孝 谷川章子	金丸憲市 穴見英三	青木忠興	山本源太	堤 正則			
第24回	濱崎裕子	橋本政孝 谷川章子	金丸憲市 穴見英三	古賀 忠	山本源太	堤 正則			
第25回	濱崎裕子	橋本政孝 佐田朝裕	森多三郎 穴見英三	古賀 忠	山本源太	堤 正則			

備考

会長は久留米大学文学部長に委嘱している。
副会長は久留米市助役（副市長）、久留米連合文化会副会長に委嘱
監事は久留米市議会副議長、久留米商工会議所専務理事に委嘱
委員は西日本新聞社久留米総局長、詩人、文芸評論家、久留米市教育委員会教育長に委嘱
幹事は第7回以降は廃止した。